

同志社大学

2010年度 卒業論文

論題：複数人の友人との会話における非言語コミュニケーション
—ケータイのディスプレイを見る行為の実験を用いて—

社会学部社会学科
学籍番号：19071033
氏名：北 晃暢
指導教員：立木 茂雄
(本文の総字数：21263 字)

目次

はじめに	1
1 先行研究	1
1.1 コミュニケーションの概念	1
1.2 コミュニケーションの構成要素	1
3 研究方法	8
3.1 対象	8
3.2 指標	9
3.3 実験方法	11
4 結果	13
4.1 記述の分類	13
4.2 印象	14
5 おわりに	16
5.1 まとめ	16
5.2 今後の課題	18
注釈	
参考文献	

はじめに

電気通信事業者協会のデータによれば、2010年11月現在、携帯電話の国内契約数は雄に1億件を超え、いまだに契約者は増え続けている。同時に、「ケータイのディスプレイを見る」という行為は、あらゆる場所において日常的に見かけられる光景となった。その光景は、複数人の友人と会話をする状況でも同様である。中村（2008）によれば、調査対象となった大学生の約59%が複数の友人と会話中に、用もないのにケータイのディスプレイを見る行為を行ったとしており、逆に複数人の友人との会話中に、友人の一人がふとケータイのディスプレイを見た時の印象では、29%が不快な気持ちを抱き、14%が相手の事情を推察、26%が相手の気持ちを推察、6%が自分の対応を反省、残りの26%が特に何も感じないと分類されたとしている。また、中村（2008）は、リアルタイムでの会話の中で「居心地が悪い」「話についていけない」「話が面白くない」といった心情の表現として発信され、受け手がそこから意味を解釈している、このケータイのディスプレイを見るという日常に浸透した行為が、新しい非言語コミュニケーションとして捉えられると述べている。しかし、この調査は、複数人の友人との会話中に友人がふと「ケータイのディスプレイを見る」行為を行った場面を思い出したり、想像したことに基づいてアンケート調査を行ったのみで、実際の観察やリアルタイムでの調査は行われていない。そこで本稿では、「複数人の友人と会話中に、用もないのにケータイのディスプレイを見る行為は、相手に不快感を与えたり、事情や心情を気遣う気持ちを起こさせる非言語コミュニケーションの1つの形として捉えられる」という説の真偽を実験を用いて検証する。

1 先行研究

1.1 コミュニケーションの概念

コミュニケーションとは何なのか。この用語の様々な場面で利用され、その意味や概念も共通の定義として捉えることは難しい。その多様にある概念の中で、深田は、コミュニケーションの概念を相互作用過程、意味伝達過程、影響過程の大きく3つに分けられるとした。深田によれば、相互作用過程は、コミュニケーションをする当事者が互いに働きかけと応答をし合う過程のことで、コミュニケーションを通じて相互理解と相互関係が成立すると考える概念のこととしている。意味伝達過程は、当事者が一方から他方へと意味を伝達する過程のことで、コミュニケーションを通じて意味を共有できると考える概念だとしている。影響過程は、当事者のうちの一方が他方に対して影響を及ぼす過程のことで、コミュニケーションを通じて他者に影響を与えることができると考える概念のことだとしている（1998）。この他にも、コミュニケーションの概念は多様にあり、共通した定義として捉える事は難しいが、本稿ではこの深田の概念を用いて考えていくこととする。

1.2 コミュニケーションの構成要素

前節でのコミュニケーションの概念とともに、コミュニケーションの基本的な構成要素も抑えておきたい。深田によれば、コミュニケーションは5つの構成要素からなっており、

その内の1つでも欠けるとコミュニケーションは成立しないと述べている。その5つの構成要素とは、メッセージの送り手、メッセージ、チャネル、メッセージの受け手、効果である(1998)。これらの構成要素についての説明も行っておく。

深田によると、メッセージの送り手の役割は、頭の中にある伝達したい情報内容を言語符号や非言語符号に変換、符号化することだとしている。送り手が伝達したい情報の内容や、符号化の正確さと様式は、送り手のパーソナリティによって異なってくるとされている。次に、メッセージとは送り手によって符号化された符号の集合体のことである。メッセージとして符号化されなければ、送り手の頭の中にある情報内容は受け手に伝わらないため、メッセージはコミュニケーションの構成要素の中で最も重要な要素であるとしている。伝えたい内容は同じであるメッセージであっても、その組立て方や順序、提示の仕方によって、受け手に異なる解釈と異なる効果があるとしている。次に、チャネルとはメッセージが運ばれる経路のことである。通常、受け手がメッセージを知覚するのに使用する感覚器官に基づいてチャネルの命名がされており、実際のコミュニケーションの場面では、複数のチャネルが同時に用いられることが多い。感覚チャネルとしては、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚があげられており、送り手は受け手に最大の影響を生み出すチャネル、送り手が利用しやすいチャネル、受け手が利用しやすいチャネルを選択するとしている。さらに、受け手は送り手が符号化したメッセージをチャネルを通して受け取る者で、送られてきたメッセージの意味を解釈することが役割である。この解釈作業を符号解読といい、受け手がメッセージの符号解読を行うことによって初めて受け手の頭の中に意味が生じ、メッセージが役割を果たすのだとしている。また、効果とはメッセージによって送り手が受け手に及ぼす影響のことである。送り手、メッセージ、チャネル、受け手の4つの基本的構成要素が、このコミュニケーションの効果を規定する要因として考えられるとしている(1998)。

1.3 対人コミュニケーション

コミュニケーションの中でも、いくつか種類は存在する。その中でも普段私たちが生活する中で1番多く交わされているのは、対人コミュニケーションである。深田によれば、人間のコミュニケーションの中で、特に個人に焦点を当てたコミュニケーションであり、意見交換、雑談、勧誘、自己紹介といったある個人と別の個人との間で交わされる個人間コミュニケーションのことを対人コミュニケーションだと述べている(1998)。

さらに、深田によれば、対人コミュニケーションの本質的な特徴は、当事者の人数、双方向的過程、対面性、心理的關係の4点だとしている。深田によれば、対人コミュニケーションの本質を示す第1の特性である当事者の人数は、コミュニケーションの当事者の人数であり、二者間で交わされるコミュニケーションを基本とするものであるというのが根本にあるとしている。ただし、個人と個人の間で交わされるコミュニケーションであるという本質的な特性が保障されるような、数人の小集団の成員間のコミュニケーションも対人コミュニケーションに含めることができるとしている。次に、対人コミュニケーションの本質を示す第2の特性である双方向的過程について深田は、コミュニケーションの送り手と受け手が固定しておらず、当事者間で送り手の役割と受け手の役割が何度も交代するとしている。また、対人コミュニケーションとは、情報交換の進行を考慮した双方向的過

程として理解されなければならないとしている。次に、対人コミュニケーションの本質を示す第3の特性である対面性について深田は、対面状況でのコミュニケーションを基本とするものだとしている。しかし、お互いが顔を合わせないで行うドア越しのコミュニケーションや、階段の上下からのコミュニケーションも対人コミュニケーションに含めることができるなど、全てにおいて顔が見えないといけないわけではない。さらに、それと同じように、パーソナル・メディアを使うコミュニケーションも広く解釈して、対人コミュニケーションと考えることができるとされている。この場合、テレビ電話、インターフォンや電話、パソコン通信、手紙の順に、顔が見えない、身体が見えない、声が聞こえないなどといった対面性が薄れ、対人コミュニケーションの本質的特徴が薄れていくとされている。最後に、対人コミュニケーションの本質を示す第4の特性である心理関係について深田は、当事者間に何らかの心理的關係が存在している場合のコミュニケーションを基本とするとしており、当事者間に心理的關係が成立している場合は、お互いが相手に対して接する時に、他の人間と接する時とは違った心理的關係が成立している者だけの特有の接し方をするとしている。もし、当事者間に心理的關係が成立していない場合や、初対面や儀礼的な場面などは、役割に応じた機械的なコミュニケーションが行われることとなる。そのため、私的で非公式なコミュニケーション、プライベートで友人と会う時などは対人コミュニケーションの特徴を強く持っている。逆に、公的で公式的なコミュニケーションや習慣化したあいさつなどの儀礼的なものは、対人コミュニケーションの本質的な特性は弱いものだとされている（1998）。これらの4点がコミュニケーションの本質的な特徴としてあげられている。また、これら4点をまとめて深田はこのように述べている。

対人コミュニケーションとは、コミュニケーションを個人のレベルで扱う場合であり、ここでは、「二者間あるいは少人数の人々の間で交わされる情報の交換過程」であると広く定義する。なお対面性と非公式性が強まるほど、対人コミュニケーションとしての性質が明確化する。（深田 1998）

対人コミュニケーションを行う目的は何なのであろうか。深田によると、情報や知識を得ること、楽しむこと、相手に情報や知識を伝えること、相手に影響を与えること、相手との対人関係を形成、発展、維持すること、課題を解決することの6種類が対人コミュニケーションを行う代表的な目的としてあげられている（1998）。

深田によると、情報や知識の獲得を目的とするものについてこう述べられている。

私たちは、何か知りたいことがあるとき、他者とのコミュニケーションを通して、それを知ることができる。獲得したい情報・知識は、①自分自身に関する情報、②相手に関する情報、③別の他者や状況や環境など外界に関する情報、の3種類がある。自分が周囲の人々からどう思われているか、どのような評価を受けているかを知りたいときに、個人は他者と対人コミュニケーションをもととする。また、関心を寄せる相手のことを知りたくて、その相手とのコミュニケーションをもとと試みる。さ

らに、個人は適切な行動をとるために、外界に関する情報を他者から集める。例えば、卒業論文を書くために指導教官を選ばなければならない大学3年生は、4年生に教官の性格や指導方針などを聞いたがる。(深田 1998)

次に、深田によると、娯楽の享受を目的とするものについてこう述べられている。

私たちは、退屈なときや孤独を感じる時、だれかとおしゃべりをして楽しみたい、気晴らしをしたいという気持ちになる。こうした目的が強く意識されることはあまり多くないが、コミュニケーションをすることを楽しむという場合はよくある。例えば、友人と、とりとめのないおしゃべりやうわさ話をして楽しむことはしばしばみられる。(深田 1998)

次に、深田によると、情報や知識の伝達を目的とするものについてこう述べられている。

自分が知り得た情報や知識を他者に伝達することを目的とするコミュニケーションがある。ただし、その情報・知識を話のネタにして楽しもうとか、相手の考え方や行動に影響を与えようといった目的が意識されない場合に限る。例えば、日本古代史に関心をもつ友人に対して、自分が最近読み終わった新刊本「出雲王国の謎」の書名とそれに書かれていた新説を知らせる場合がそうである。(深田 1998)

また、深田によると、相手に対する影響力行使を目的とするものについてこう述べられている。

私たちが他者との間で行なう対人コミュニケーションは、相手に対して何らかの影響を与えることを目的とすることが多い。影響を与えるためのコミュニケーションとしては、相手の態度や行動を変えようと説得するコミュニケーション、命令や強制といった相手を支配するコミュニケーション、相手をだます欺瞞のコミュニケーション、相手を援助する(励ます、慰める)コミュニケーション、相手を攻撃するコミュニケーションなどが考えられる。(深田 1998)

さらに、深田によると、対人関係の形成・発展・維持を目的とするものについてこう述べられている。

相手との間に友好的な対人関係を形成するために、さらに親しくなり対人関係を発展させるために、あるいは現在の望ましい対人関係を維持するために、私たちは対人コミュニケーションを行なう。コミュニケーションが途絶えると、対人関係は疎遠になって

しまう。親しくなるためには、対人コミュニケーションを通して相互に相手のことをよく知り、理解することが必要条件である。特に対人関係の形成初期の段階では、自分のことを知らせるコミュニケーション（自己開示）が重要である。また、自分に関する情報を操作して相手に特定の印象をもってもらおうようにふるまうコミュニケーション（自己呈示）もよく用いられる。（深田 1998）

最後に、深田によると、課題解決を目的とするものについてはこう述べられている。

解決が必要な課題を抱えているとき、私たちは他者からの情報や援助を求めて、対人コミュニケーションを行なう。また、他者との間で解決すべき問題や葛藤が存在するとき、私たちは自分が不利な立場に追い込まれないように相手との交渉や取り引きのコミュニケーションを行なう。相手に要請するコミュニケーションも、交渉のコミュニケーションの一部である。（深田 1998）

1.4 言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションの分類

送り手から受け手にメッセージを伝える際に用いられる手段は、言語だけではない。このメッセージによる分類について、ゴフマンはこう述べている。

情報は、直截的な伝達であろうと表出的な伝達であろうと、身体的なものであるか、それとも脱身体的なものであるかのどちらかである。顔をしかめたり、口頭で話したり、足げりをしたりするのは、送り手が自分の身体そのものを動かすことによって伝達するメッセージである。脱身体的なメッセージは、手紙や、郵送された贈り物、あるいはたった今にげていった動物の足跡などから、われわれが読みとるものである。この種のメッセージは、送り手が情報提供をやめた後でもしばらくの間は、その情報の手がかりを与えてくれるものでなければならない。（ゴフマン 1963）

このように、ゴフマンはメッセージの種類を身体的なものと脱身体的なものに分けている。また、大坊によれば、情報を伝えるためのメッセージで、伝えるために言葉を用いる場合を言語的コミュニケーション、言語以外のものを用いる場合を非言語的コミュニケーションと分類できるとしている（1998）。

1.5 非言語コミュニケーション

非言語的コミュニケーションの種類と特徴について説明していく。大坊によると、言語的コミュニケーションが発言の内容や意味を指すのに対して、非言語的コミュニケーションは声の高さや速度、沈黙の間などの発言の形式的な側面、視線や顔の表情、姿勢やジェスチャーなどの身体動作、対人距離や着席位置などの空間行動、被服や化粧などの人工物、

インテリアや温度などの環境など、様々なチャネルの種類と特性があるとも述べている。また、言語的コミュニケーションは、その言語の文意や語義が問題とされており、意図的にメッセージを送ったり、意識してメッセージを伝えるという程度が高いのに対して、非言語的コミュニケーションは、送り手の何気ない仕草や振る舞いなどの、意識していない動作であっても受け手にメッセージとして伝えられる可能性は否定できない。そのため、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションの間に矛盾が発生した時には、非言語的コミュニケーションから本音が漏れ出す事が多いとされている。また、非言語的コミュニケーションは言語を補う役割が強いとされている(1998)。そのことについては、ゴフマンが言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションについて述べていることから伺える。

人間は、情報を伝達する時、社会的に確立した言語手段(すなわち話ことば)、あるいはその代用となる文字や図や身振りなどの手段を使用する。これは、受け手にメッセージを伝える送り手から見た形態である。しかし、われわれは自己に関する情報を表的に伝達することもある。この場合には、情報は偶発的に、あるいは何気なく、または意味あり気に伝達され、受け手はそれをひろうという形になる。言語的メッセージは、あらゆることさらに「関連」するが、送り手自身のことについては別として、一般に、情報の送り手と情報の内容とは必然的な関連はない。表出的メッセージは、当然のことながら、その伝達媒体となる人間の身体に「関連」する。(ゴフマン 1963)

このことから、非言語的コミュニケーションは主に、感情などの自分自身の状態についての情報を発信するものだということがわかる。非言語的コミュニケーションが、感情などの自分自身に関連する情報を発信するものならば、非言語コミュニケーションから本音が漏れ出す事が多いのには納得のいくことである。

次に、非言語的コミュニケーションの特徴を説明していく。深田によれば、言語的コミュニケーションと比べた非言語的コミュニケーションの特徴は、言語との独立性、状況による意味の変化、抽象的・論理的情報伝達の困難さ、感情伝達の有効性の4点であるとしている(深田 1998)。

まずは、言語との独立性について説明していく。深田によると、言語とは独立した非言語的コミュニケーションが存在し、その種類を分類すると「言語的コミュニケーションは顕著化しているが、非言語的コミュニケーションは顕著化していない場合」、「言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションがともに顕著化している場合」、「言語を全く使用しないで、非言語コミュニケーションのみが使用される場合」の3つの形態が考えられるとしている(1998)。

「言語的コミュニケーションは顕著化しているが、非言語的コミュニケーションは顕著化していない場合」について、深田はこう述べている。

一般的には言語的コミュニケーションが交わされているとみなされる場合であるが、

そこには少なくとも準言語に属する非言語的要素が付随している。例えば、音声言語には声の高さや間(ま)など、文字言語には文字の形や大きさなどが常に存在している。(深田 1998)

次に、「言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションがともに顕著化している場合」について深田はこう述べている。

非言語的コミュニケーションが言語的コミュニケーションを補強したり、逆の意味を伝達している場合である。例えば、愛の告白には、真剣な表情、相手の目の凝視、身体の方向や傾き、相手との適度な距離などの身体動作や空間行動に加えて、告白の言語に伴う声の高さ、大きさ、間(ま)のとり方などの準言語が大切な役割を果たしている。(深田 1998)

深田によれば、先ほども述べたように、言語的コミュニケーションのメッセージの意味と非言語的コミュニケーションのメッセージの伝達する意味が異なるコミュニケーションのことを二重束縛的コミュニケーションといい、意識的にコントロールすることの難しい非言語的コミュニケーションの方が多く真実を語っているとしている(深田 1998)。また、「言語を全く使用しないで、非言語コミュニケーションのみが使用される場合」について深田はこう述べている。

言語コミュニケーションの代わりに非言語的コミュニケーションが使用されるときや、非言語的コミュニケーションでしか伝達できないときである。例えば、沈黙が要求されるコンサート会場や騒音で声が届かない駅のプラットホームで、友人を呼び寄せるときには、手を振り、手招きをするやり方がとられる。(深田 1998)

深田によると、対人コミュニケーションの中で、非言語コミュニケーションを含まない言語的コミュニケーションは存在しないが、言語的コミュニケーションを含まない非言語的コミュニケーションは存在するとしている(1998)。

次に、状況による意味の変化について説明する。深田によると、非言語的コミュニケーションで伝達されるメッセージは、ほとんどの場合においてそれ自体の意味は固定されておらず、状況や文脈によってその意味は変化していくとされている(1998)。

さらに、抽象的・論理的情報伝達の困難さについて説明する。非言語的コミュニケーションは、数学の円の面積を求める公式、心理学の返報性の規範や夏休みの海外旅行の体験、研究成果の報告などはほぼ不可能であり、抽象的な情報や論理的な情報を伝達するには適していないとされている(1998)。

最後に、感情伝達の有効性について説明する。深田によると、抽象的な情報や論理的な情報の伝達には、非言語的コミュニケーションは不向きであるが、個人のもつ感情や対人態度の伝達には適しているとしている。自分の感情を言語的コミュニケーションによって伝

達するのは難しいが、非言語的コミュニケーション、その中でも特に表情は人間の感情や相手に対する態度を適確に表現することができるとしている。また、言語的コミュニケーションを意識的にコントロールすることに比べ、非言語的コミュニケーションを意識的にコントロールすることは難しいため、無意識のうちに非言語的コミュニケーションから感情や対人態度を他者に伝達してしまうことが多いとされている。また逆に言えば、他者の感情や対人態度も非言語的コミュニケーションを通じて知ることが可能であると考えられる（1998）。

深田によると、対人コミュニケーションの中で非言語的コミュニケーションがどのような働きをしているかについて、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションとの関係において分類できるとしている。それは、身振りや表情などが加わることによって、言語的コミュニケーションの伝達が補強されるような、言語的コミュニケーションを支える機能と、言語的コミュニケーションの使用が不可能な事態で、言語的コミュニケーションの代用として非言語的コミュニケーションが用いられるような、言語的コミュニケーションに代わる機能に分類できるとしている（1998）。

1.6 非言語行動と非言語的コミュニケーション

非言語行動と非言語的コミュニケーションの違いや区別は何なのか。その違いについて相川・高井はこのように述べている。

非言語行動とは非言語的な行動のことを指す用語であり、非言語的コミュニケーションは、他者に解釈される可能性がある場合（メッセージとなる可能性がある場合）の非言語行動のことを指す。たとえば、他に誰もいない部屋の中で腕を組む場合は、非言語行動であるが非言語的コミュニケーションとはいえない。一方、他者の話を聞きながら腕を組む場合は、腕を組むという行動が他者に何らかの解釈を与える可能性があるため、非言語的コミュニケーションとなる。無論、人や状況によっては相手の非言語行動から何も感じ取らない場合や、行為者は意味を送っているつもりがなくても勝手に解釈をされてしまう非言語行動が存在する場合もある。（相川・高井 2010）

このように非言語行動と非言語的コミュニケーションは区別されている。しかし、メッセージとなる可能性がある場合の非言語行動を全て非言語的コミュニケーションとした場合、対面的なコミュニケーションで行われるほぼ全ての動作が非言語的コミュニケーションとなる。そのため本稿では2.1節で取り上げた、深田の3つのコミュニケーションの概念を用いて、非言語行動に対して相互作用が起こった場合、メッセージの意味が伝わった場合、非言語行動が他者に影響を及ぼした場合を非言語的コミュニケーションとして考える。

1.7 身体のもつ記号体系

ゴフマンによると、直接的接触の関係にある人びとは、話しことばでコミュニケーションをする必要がない場面であっても、ある種のコミュニケーションを相互に行っていると

している。それはすべての状況において、意味というものは必ずしもことばによるコミュニケーションに限定されるとは限らないからであるとしている。身体的外観や個人的行為は一定の意味を持っており、服装、身体の動き、姿勢、音の大きさ、あるいは手を振ったり会釈したり顔の表情を変えたりするといったしぐさには、人間の感情が表れていると言うことができる(1963)。2.4節で、このような言語以外の身体の動きや特徴などによって伝えられるメッセージ、交わされるコミュニケーションのことを非言語的コミュニケーションという述べた。ゴフマンによると、この種のコミュニケーションはすべての社会で行われており、その中でも人間のしぐさの多くは、特に注意を引くことがなくても、少なくともいくつかは規則化され、共通の意味が与えられるとしている。また、直接的接触関係にある人びとだけが、おたがいに相手の外観やジェスチャーから、その表現の意味を理解し合えろとし、それらの表現体系から、人間の身体はひとつの記号体系であることがわかるとしている(1963)。また、身体のもつ記号体系の働きも知っておきたい。ゴフマンによると「身体のもつ記号体系には話ことばの意味を明確にする働きがある」(1963:38)。これは、2.4で述べた、非言語的コミュニケーションは言語を補う役割が強いという特徴と同様である。ゴフマンによると、この働きは対人コミュニケーションのような、コミュニケーションをとる対象が定まっている場合の相互作用において重要な役割をはたすとしている。しかし、身体のもつ記号体系の特徴は、コミュニケーションという観点から考えると、焦点を定めることやある範囲の人びとに限定してメッセージを送るということがなかなか困難で、極端な場合には、状況全体のすべての人々、つまり自分の周囲にいる人や自分の姿を見ることが出来る人すべてに拡散してしまうことだとしている。また、これらの記号は、コミュニケーションをとる対象が定まっている対人コミュニケーションの相互作用でも一定の役割をはたすが、公共空間などのようなコミュニケーションの対象が定まらない場面での相互作用において重要な役割をはたすとしている(1963)。また、ゴフマンによると「すべての人びとは同一の身体記号について多少は共通の知識をもっている」(1963:39)。これらのことが、身体のもつ記号体系の特徴として言えるだろう。

1.8 非言語コミュニケーションと「ケータイのディスプレイを見る」行為

「ケータイのディスプレイを見る」という行為は、非言語コミュニケーションとして捉えることができるのか。中村(2007a)は、大学生を対象として2つのアンケート調査を行い、そこからケータイのディスプレイを見る行為について考察している。中村によると、利用者はケータイのディスプレイを見るという行為そのものを、周囲の環境や現実空間を共有する者との関係に照らし合わせ、様々な利用の仕方をしていると述べている。コミュニケーションを間接的に拒絶したり、自らの態度をアピールするなど、現実空間におけるリアルタイムの人間関係の調節のために利用される場合があるとしている。また、ケータイを使用する者の多くは、その行為が周囲の人間にどんな印象を与えるかを知りながらも、多くは現実空間での人間関係の調節のために自覚的に利用している。これらをふまえ、ケータイのディスプレイを見る行為は、新しい身体言語、新しい非言語コミュニケーションとして捉えるべきだとされている(2007a)。

1.9 公共空間での「ケータイのディスプレイを見る」行為

ここでは、中村の文献について、引用して説明する。

本稿では、ケータイのディスプレイを見る行為について、調査会社を活用して全国的に行った調査結果の報告と考察を行った。予備的調査で得られた気まずい場面例を用いて、「用もないのに」ケータイを取り出したくなる欲求の強さをアンケートで答えて貰い、3つの用法と目的を参照して分析を行った。

調査の規模を拓げても、多重文脈性をまとうこと、つまり自らの社会性や人間関係をアピールすることが必要な場面で、「用もないのに」ケータイを利用する欲求は高かった。また、一人で公共交通機関（主に電車）に乗るような場面においては、特定の方向からの視線のやりとりを避けることが必要な場面でケータイ利用の欲求が高くなった。状況における必要性に応じて、ケータイの利用欲求が高くなることは、多くの人が公共空間において何らかの対応を用いて乗り切らねばならないような気まずさ、居心地の悪さを感じていること、ケータイがそれらの状況を調節するためのツールとして利用されていることを示している。ただし、いくら気まずくても、明らかに非道徳性をごまかすような行動には、ケータイのディスプレイを見る行為は、ほとんど役に立たないであろうことも被験者のアンケート結果は示しており、ケータイ利用が効果的であるのは、限定的な状況下であることを伺わせる。また講演会場（講義室）に一人でやってきて、周囲に話せる知り合いが居ないまま、講演（講義）が始まるのを待っている場面では、以前に行った大学生に対する調査において高い利用意向が示されたが、今回の一般的な調査では、利用意向が高くなかった。大学生と一般の人では、講義に日常的に接する頻度が大きく異なるため、これらの結果を踏まえ、さらに詳しく調査、考察する必要がある。

被験者の属性（年齢・男女別）と「用もないのに」ケータイの利用意向との対応も併せて分析した。ほとんどの設問において、年齢が上がるにつれ、ケータイの利用意向は減少しているが、一方で、各設問に対する利用傾向そのものは、若いユーザも年配のユーザも同様であった。一般に、ケータイ利用に不得手で縁遠いかのような印象をもたれる年配の人たちも、若いユーザと同じように、ケータイのディスプレイを見る行為を非言語的行動として利用している姿を本調査は示している。女性のユーザは、女性特有のリスクや気まずさに対応する必要がある場面や、周囲からの干渉を無言で拒否する必要がある場面で、高いケータイ利用意向がある。公共空間は、「公共的」とは云うものの、女性にとって、不利で不快な状況が起こりやすい空間であると指摘されており、さらに公共空間で避けるべき状況に対して、女性は無言で対応することを迫られているとあって良いだろう。このような立場にある女性に対して、ケータイは、その需要に適応した非言語行動を支援していると言える。ケータイが女性に親和性が高いことは、多くのデータが指摘していることである。その原因の一つとして、公共空間で起こる女性特有の状況を乗り切るためのツールとしての有用性が挙げられる可能性を本調査は示唆している。

公共空間は、ケータイを「用もないのに」使いたくなるような状況が頻発する空間である。ケータイを利用した非言語行動を通して、人々がメッセージのやりとりを行って

るならば、この行為は非言語的コミュニケーションとして、広く普及しつつあると推測できる。1990年代のケータイ端末普及期には、公共の場における通話マナーの問題が多く取り上げられたが、その時代を超えた2000年代において、公共空間は、ケータイのディスプレイを見る行為による非言語コミュニケーションが頻繁に行き交う空間に変貌したと言っても良いだろう。公共空間とは、ケータイ端末の遠隔通信機能やマルチメディア機能とは別の使い方である「ケータイのディスプレイを見る行為」を必要とする空間だったのだ。ケータイのディスプレイを見る行為を理解することが、公共空間のあり方を見つめ直す契機となりうるだろう。今後、公共空間の「公共性」を再考するとともに、ケータイという情報通信端末が我々の社会に及ぼす影響を改めて理解する必要があると考える。

また、公共的な場面のみならず、家族や友人などの親しい者といえるようなプライベートな場面においても、ケータイのディスプレイを見る行為は多発しているといっても良い。親しい者と交わすコミュニケーションにおけるこの行為の果たす役割や効果も、今後の考察の視野に入れていくべきであろう。(中村 2009)

このように中村は述べており、公共空間での「ケータイのディスプレイを見る」行為について考える必要があるとされている。

1.10 複数人の友人との会話における「ケータイのディスプレイを見る」行為

複数人の友人との会話において人は、どのような場面で「ケータイのディスプレイを見る」行為を行うのか。中村によると、複数人の友人との会話における場面で、連絡すべき用件や着信、すぐに見たいネットのコンテンツがあるわけでもないにも関わらず、用もないのに「ケータイのディスプレイを見る」行為を行った人の多くが、目の前で進行中の会話の状況が本人にとって余り好ましい状況ではなく、その状況を調整するために「ケータイのディスプレイを見る」行為を行うとしている(2008)。また、複数人の友人との会話中に友人がふと「ケータイのディスプレイを見る」行為を行った場面を被験者に思い出す、もしくは想定してもらいアンケート調査を行った結果について中村はこうまとめている。

この行為に対して、相手を強く非難する者もいたが、一方で、怒ることなく、その態度を引き起こした原因を推測する者も多かった。特に、自らのケータイ利用経験を相手に投影して、相手の心情と行動を理解しようとしていると推察できる者も少なからず居た。相手を批判するどころか、自らのコミュニケーションの進め方の反省材料にする者も少数ながら存在した。また、その一方で、「何も」「普通」「特に」といった、気にとめていないことを表すような印象を回答する者もいた。(中村 2008)

中村によると、「ケータイのディスプレイを見る」行為は、非言語コミュニケーションとして捉えられ、そこでのやりとりは、自らの経験や想像を通して多様化していると言うことができる(2008)。

2 研究方法

2.1 調査目的

中村によると、リアルタイムでの会話の中で「居心地が悪い」「話についていけない」「話が面白くない」といった心情の表現として発信され、受け手がそこから意味を解釈している、この「ケータイのディスプレイを見る」という日常に浸透した行為が、新しい非言語コミュニケーションとして捉えられ、そこでのやりとりは、自らの経験や想像を通して多様化していると述べている（2008）。しかし、この調査は、複数人の友人との会話中に友人がふと「ケータイのディスプレイを見る」行為を行った場面を思い出したり、想像したことに基づいてアンケート調査を行ったのみで、実際の観察やリアルタイムでの調査は行われていない。そのため、実際に調査者がリアルタイムでの会話の中で「居心地が悪い」「話についていけない」「話が面白くない」といった心情の表現として「ケータイのディスプレイを見る」行為を行った場合に、「複数人の友人と会話中に、用もないのにケータイのディスプレイを見る行為は、相手に不快感を与えたり、事情や心情を気遣う気持ちを起こさせる非言語コミュニケーションの1つの形として捉えられる」という仮説の通りに捉えられるのかについては行われていない。そこで、実験を行い、リアルタイムに感じた印象を調査することで、この仮説の真偽を検証することを目的とした。

2.2 調査対象

中村（2008）は、ケータイを持つ大学生の被験者に対して、「用もないのに」ケータイのディスプレイを見る行為について、複数の友人との会話中の場面において、友人の一人がふとケータイを取り出してディスプレイを見た場合を被験者に思い出す、または想像してもらい、どんな印象や評価を持つか、自由記述の形でのアンケート調査を行った。本稿では、この中村（2008）の調査内容に基づいて、複数の友人との会話中の場面において、友人の一人がふとケータイのディスプレイを見た場合にどんな印象を持ったのかを、思い出したイメージではなく、実際に調査者が会話中にケータイのディスプレイを見る行為を行い、その後すぐに調査紙を用いて印象を聞き出すという、実験形式での調査を行った。

まず、調査対象の年齢について考えておきたい。深田によると、社会的地位が異なる当事者間で行われるコミュニケーションのことを垂直的コミュニケーション、社会的地位が等しい当事者間で行われるコミュニケーションのことを水平的コミュニケーションであると述べている（1998）。垂直的コミュニケーションである場合、先輩や後輩などの地位の関係で、コミュニケーションが儀礼的になる場合が考えられる。また、そのため、水平的コミュニケーションとして、調査者と同大学で同年代である者を調査対象とした。

さらに、ジェンダー差についても考えていきたい。中村によると、公共空間において女性の携帯ユーザは、女性特有のリスクや気まずさがあり、男性よりも用もないのにケータイを使用する割合が高いとされている。また、ケータイが女性にとって親和性が高いということも述べている（2009）。そのため、複数の友人との会話の場面においても、女性のケータイの親和性の高さなどが関係して、男女間で差が生じると考えられる。そのため、今回の実験は男性のみ

を調査対象として行った。

また、中村（2008）では複数の友人と定められているが、被験者それぞれがイメージをするため何人であるかは定められていない。そのため実験では、複数人という定義を調査者を含めて3人、4人、5人と定め、それぞれ各4組ずつ、計36名を対象に行った。

最後に、調査対象の友人という関係を考える。ゴフマンによると、相互作用を行う対象として、焦点の定まらない相互作用と、焦点の定まった相互作用があるとされている。焦点の定まらない相互作用とは、人びとが単に同じ社会状況に居合わせるというだけで生じるコミュニケーションのことであり、焦点の定まった相互作用とは、一群の個人がお互いに特別の関心をはらい、特別の相互行為を持続するというコミュニケーションのことをさすとされている（1963）。焦点の定まらない相互作用の典型は、公共空間で居合わせたすべての人びととの相互作用だと考えられる。それに対して、焦点の定まった相互作用は、友人との会話などの場面が考えられる。しかし、ゴフマンによると、焦点の定まらない相互作用から出発して、焦点の定まった相互作用に発展することもあるとされている（1963）。これには、初対面の人との会話の場面なども考えられるが、今回の実験では初対面の人との相互作用は含まないこととする。ゴフマンによると、焦点の定まった相互作用の中で、「知り合い」という社会関係があるとされている。「知り合い」とは、お互いが相手特有の特徴を知っていて、相手を個人的に確認することができる関係であると述べられている（1963）。このゴフマンの「知り合い」という関係にもとづき、その中でも多く相互作用を交わしたことがあり、親しい人間関係だと考えられる「友人」を調査対象とする。また、今回の実験では、その実験の調査者と居合わせる全ての被験者同士が、「友人」という関係にあてはまる者を対象として行った。

2.3 実験の説明

実験を行うにあたって、被験者に対して、実験を行うと告知することは、正確なデータを取る妨げになる。実験を観察されているという意識は、被験者が普段とは異なる行動をする原因になると考えられる。ゴフマンは関与のことをこう述べている。

関与とは、ある個人がある行為—ひとりでする仕事、会話、協同の仕事など—をするのに調和のとれた注意をはらったり、あるいははらうのをさし控えたりする能力のことをいう。つまり、関与は、行為者と関与対象との間に緊密な関係があることを前提とし、関与者自身が対象に没頭しているということを含んでいる。（ゴフマン 1963）

つまり、複数人の友人との会話における場面での被験者の関与対象は会話ということになる。会話に没頭することは、その状況に関与していると言えるだろう。また、ゴフマンは、こう述べている。

われわれは、自分の行為のある部分がそこに居合わせたすべての人びとに知覚されていると半ば意識すると、それが公共的な意義をもつことを自覚して、適切と思われる形に修正しようとする。時には、ただ他人に見られるという理由だけで、そのようなこと

をすることもある。(ゴフマン 1998)

ゴフマンが述べているように、見られているという意識は、被験者に対して規制を与える。そのため、普段とは違った行動を行ったり、または模範的な行為のようなものからはずれないように行動を修正する可能性が考えられる。そのため、今回の実験では、被験者に対して実験を行うということを告知せずに行うこととする。

2.4 調査概要

この調査はケータイを持つ男子大学生を対象に行った。調査人数は合計 36 名である。第 1 回調査は 2010 年 10 月に行い、同志社大学生 9 名を対象とした。第 2 回調査は 2010 年 11 月に行い、同志社大学生 9 名を対象とした。第 3 回調査は、2010 年 12 月に行い、同志社大学生 18 名を対象とした。全ての調査において、調査者と同じ 22 歳の男性のみを対象として行うことで、絞り込んだデータをとることを目的とした。

調査の詳細としては、『親しい者で行う非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」とその多様化』（中村 2008）でのアンケート調査であげられた場面をもとに、複数人の友人と会話する場面に実験を行った。アンケート調査で被験者は、用もないのにケータイのディスプレイを見る行為を行う場面として、主に参加する会話の状態が好ましくなく、「居心地が悪い」「話についていけない」と感じた時だとしている。そのため、実際の会話中に、調査者自らが上記のような場面でケータイのディスプレイを見る行為を行った。その行為を行ってから 10 分間を実験の時間として定め、その間に数回ケータイのディスプレイを見る行為を行った。10 分間の実験が終了した後に、被験者に初めて調査についての説明を行い、その後、調査者が会話中にふとケータイをとりだしてディスプレイを見た時に感じた印象・評価と、調査者が行ったケータイのディスプレイを見る行為に対して意識して行ったことを調査紙を用いて自由記述の形で記載するように依頼した。

3 結果

3.1 記述の分類

分類を行うにあたって、中村 (2008) と同様の方法で分類を行っていく。中村によれば、ケータイを取り出した者への批判的な表現（「失礼」、「無礼」、「身勝手」など）が含まれている回答を「失礼な態度に憤慨」、ケータイを取り出した者に起きた事情（「メール」、「予定」、「何か」など）を推察する表現が含まれている回答を「相手の事情を推察」、ケータイを取り出したものの心情（「つまらない」、「わからない」、「退屈」など）を推察する表現が含まれている回答を「相手の心情を推察」、自らの対応を省みる（「後悔」、「しまった」など）表現が含まれている回答を「自分の対応を反省」、これら上記の基準に合わない表現が含まれている回答を「その他」として分類を行ったとされている (2008)。

この中村の基準をもとに、まず、36 名の有効回答から調査者が会話中にふとケータイをとりだしてディスプレイを見た時に感じた印象・評価を分類していく。それとともに、調

査者が行った「ケータイのディスプレイを見る」行為に対して意識して行った反応や行為がある被験者の数についても記載する。これは、調査者が「居心地が悪い」「話についていけない」といった心情の表現として行った「ケータイのディスプレイを見る」行為の影響を受けて、被験者が気を使って調査者に話をふる、話題を変えるなどといった反応を示した者の数のことを示す。()内の数値は、それぞれにグループ分けされた人数を表す。[]内の数値は、全体の百分率を表す。【】内の数値は、調査者が行った「ケータイのディスプレイを見る」行為に対して意識して行った反応や行為がある被験者の人数を表す。

- A. 失礼な態度に憤慨 (2) [6%] 【0】
- B. 相手の事情を推察 (6) [17%] 【0】
- C. 相手の心情を推察 (18) [50%] 【12】
- D. 自分の対応を反省 (1) [3%] 【1】
- E. その他 (9) [25%] 【0】

次に、これら 36 名の有効回答を 3 名での実験、4 名での実験、5 名での実験にそれぞれ分けて分類していく。この時の分類も中村 (2008) と同様に行う。3 名での実験では 8 名の回答から、4 名での実験では 12 名の回答から、5 名での実験では 16 名の回答からそれぞれ分類を行った。()内の数値は、それぞれにグループ分けされた人数を表す。[]内の数値は、それぞれの人数での実験の中での全体の百分率を表す。【】内の数値は、調査者が行った「ケータイのディスプレイを見る」行為に対して意識して行った反応や行為がある被験者の人数を表す。

3 名での実験

- A. 失礼な態度に憤慨 (0) [0%] 【0】
- B. 相手の事情を推察 (2) [25%] 【0】
- C. 相手の心情を推察 (4) [50%] 【3】
- D. 自分の態度を反省 (1) [13%] 【1】
- E. その他 (1) [13%] 【0】

4 名での実験

- A. 失礼な態度に憤慨 (1) [8%] 【0】
- B. 相手の事情を推察 (1) [8%] 【0】
- C. 相手の心情を推察 (7) [58%] 【5】
- D. 自分の対応を反省 (0) [0%] 【0】
- E. その他 (3) [25%] 【0】

5 名での実験

- A. 失礼な態度に憤慨 (1) [6%] 【0】

- B. 相手の事情を推察 (3) [19%] 【0】
- C. 相手の心情を推察 (7) [44%] 【4】
- D. 自分の対応を反省 (0) [0%] 【0】
- E. その他 (5) [31%] 【0】

4 考察

中村によると、複数の友人との会話中に、友人の一人がふとケータイのディスプレイを見た時の印象では、29%が不快な気持ちを抱き、14%が相手の事情を推察、26%が相手の気持ちを推察、6%が自分の対応を反省、残りの26%が特に何も感じないと分類されたとしている(2008)。今回の全体の調査結果と比べてみると、大きく変わってくるものは、不快な気持ちを抱く者と、相手の気持ちを推察する者の割合である。中村(2008)の調査では、友人の一人がふとケータイを取り出してディスプレイを見た場合としか書かれておらず、友人がどういったタイミングで、どのような意図を持って「ケータイのディスプレイを見る」行為を行ったのかはわからない。そのため、友人が状況にそぐわないタイミングで「ケータイのディスプレイを見る」行為を行ったことを想像した被験者もいると考えられる。その結果、中村の調査結果では不快な気持ちを抱く者が本稿よりもかなり多くの割合であったと考えられる。それに対して、本稿の実験では、明確に「居心地が悪い」「話についていけない」といった場面でのみ、「ケータイのディスプレイを見る」行為を行った。調査者が非言語コミュニケーションとして意識して伝えようとした行為の意味が、多くの被験者に伝わったため、相手の心情を推察する被験者の割合が多くなったと考えられる。

次に、それぞれの人数での調査結果について考える。中村によると、CとDの分類では、ケータイを取り出す行為の原因が、進行中のコミュニケーションにあることを前提としており、被験者は、進行中のコミュニケーションが退屈であったり、話題が理解できないから、調査者がやむを得ず意図的にケータイを取り出したのだと推測していると言っている(2008)。これをふまえて考えると、3名、4名、5名と実験人数が増えるごとにCとDの合計の割合が低くなっている。この結果は、「ケータイのディスプレイを見る」行為の原因が、進行中のコミュニケーションにある前提の中で、少人数であるほど調査者の非言語行動の原因や意味が正確に伝わりやすいということを示していると考えられる。逆に、Eの分類は3名、4名、5名と実験人数が増えるごとに割合が高くなっている。この結果は、人数が増えるほど、コミュニケーションに関与していない人に無関心になることを示していると考えられる。

また、調査者が行った「ケータイのディスプレイを見る」行為に対して意識して行った反応や行為がある被験者の割合は、3名、4名、5名と実験人数が増えるほど少なくなっている。これは、調査者の「ケータイのディスプレイを見る」行為の原因がコミュニケーションの不備にあると認識していても、人数が増えるほどそのコミュニケーションを操作しにくくなることを示していると考えられる。

おわりに

本稿では「複数人の友人と会話中に、用もないのにケータイのディスプレイを見る行為は、相手に不快感を与えたり、事情や心情を気遣う気持ちを起こさせる非言語コミュニケーションの1つの形として捉えられる」という仮説の真偽を実験を用いて検証してきた。実験では、複数人の友人と会話中に「居心地が悪い」「話についていけない」と感じるような場面で、調査者が「ケータイのディスプレイを見る」行為を行い、その時に被験者は、6%が不快な気持ちを抱き、17%が相手の事情を推察、50%が相手の気持ちを推察、3%が自分の対応を反省、残りの25%が特に何も感じないという印象を感じた。特に何も感じないと分類された被験者以外の約76%は、「ケータイのディスプレイを見る」行為に何らかの印象を抱いていた。2.4節で深田のコミュニケーション概念を用いて定めた、非言語コミュニケーションの概念をもとに考えると、これらの印象を与えたことは、「ケータイのディスプレイを見る」行為が非言語コミュニケーションの1つの形として捉えることができるといえるだろう。また、相手の心情を推察に分類された被験者と、自分の態度を反省に分類された被験者の中には、その印象を抱いた後、気を使って調査者に話をふる、話題を変えるなどといった反応を見せる被験者もいた。これは、「ケータイのディスプレイを見る」行為という非言語コミュニケーションから、相互作用が行われた理想的なコミュニケーションの形ではないだろうか。

また、2.6節で身体のもつ記号体系、つまり非言語コミュニケーションのいくつかは規則化され、共通の意味が与えられるとしていた。今回の実験で、調査者は「ケータイのディスプレイを見る」行為を「居心地が悪い」「話についていけない」という心情の表現として発信した。それに対して、被験者の50%がその心情を推察するという印象を抱いていた。これは、身体の記号体系、つまり非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る」行為が、約半数の被験者にとっては共通の意味を持っていたと考えられるのではないだろうか。

複数人の友人との会話中に、「居心地が悪い」「話についていけない」「話が面白くない」といった心情の表現として行われる「ケータイのディスプレイを見る」という行為は、多くの受け手にも非言語コミュニケーションの1つの形として捉えられている。しかし、その印象は様々であり、規則化して共通の意味を与えることは難しい。しかし、「ケータイのディスプレイを見る」行為は、人によって様々な形ではあるが、これからも非言語コミュニケーションの1つのツールとして利用され、対人コミュニケーションの場に影響を与えるだろう。

今回の実験調査の対象は、22歳の男子大学生にのみ行った。そのため、調査結果は偏っているものと考えられる。また、そのデータをもとに行った考察もまだまだ改善の余地があると考えられる。今回の実験は、社会的地位が等しい者のみで行われた水平的コミュニケーションを取り上げて行ったが、社会的地位が異なる者で行われる垂直的コミュニケーションの場合、実験結果は変わってきただろう。ジェンダーでも同様なことが言える。今回の実験は、男性のみで行ったが、女性のみ、男女混同ではまた違った実験結果が出たと考えられる。それぞれの実験結果から、複数人の友人との会話中に「ケータイのディス

プレイを見る」行為を行ったときに感じる印象の男女差や地位差を出し、そこからさらに深く非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る」行為を検討していくことが、今後の課題だと考えられる。

【参考文献】

電気通信事業者協会,2010,「携帯電話／PHS／無線呼出し契約数」,電気通信事業者協会ホームページ,(2010年12月22日取得,<http://www.tca.or.jp/cgi/tcagraph.cgi>) .

Erving Goffman,1963,Behavior in Public Place:Note on the Social Organization of Gatherings,Free Press. (=1980,丸木恵祐・本名信行訳『ゴッフマンの社会学4 集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房.)

中村隆志,2007(a),”非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」”,『情報文化学会誌』,14(1),pp.31-38

———,2007(b),”多重文脈性をまとうツールとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」”,『情報文化学会誌』,15(1),pp.12-19

———,2008,”親しい者で行う非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」とその多様化”,『情報コミュニケーション学会誌』,Vol.4,No.s1&2,pp.4-9

中村隆志・大江宏子,2009,”公共空間における非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」”,『情報社会学会誌』,Vol.4,No.1,pp.28-37